

イガイの生産技術安定化と養殖方法について

普及指導チーム 伊藤貴範

□本県の二枚貝養殖は、ニーズの多様化や近年の貝毒規制の影響等により生産が思うように伸びていないため、漁業収入を補完する新たな養殖品目の開発が望まれている。
 在来種のイガイは、関東や西日本で消費され市場性が高い付着性二枚貝であることから、新たな垂下養殖品目として種苗確保の方法や養殖方法について検討してきた。

イガイについて

○イガイ

日本の在来種。日本海側で夏季に素潜りで漁獲されている。
 瀬戸内海では古くから漁獲対象。

○ムラサキイガイ

地中海原産の外来種。群生で付着により被害が生じることもある。環境省で要注意外来生物に指定されており、養殖については在来生態系への影響を考慮する必要がある。



写真1 在来種のイガイ

採苗技術の安定化

□付着器投入による天然採苗では種苗確保が困難だったため、人工採苗による種苗生産に取り組んだ。
 初期餌料や飼育条件の検証・改善を続けた結果生残率が向上し、実用的な種苗生産（15個体前後の親貝から1万個程度の稚貝生産）が可能となった。

効率的養殖方法の確立

□イガイは付着性二枚貝でありながら、付着後も足糸を自切して移動するため散逸を防ぐ養殖方法（カゴ養殖等）が必要であった。

丸カゴによる養殖は管理に手間がかかり、巻貝・カニ等による食害も問題だったことから、コットンネットを用いた新たな養殖方法を考案した。

出荷サイズ（10cm）まで2年間ほとんどメンテナンスすることなく養殖することが可能であった。



写真2 コットンネットでカバーし、食害・散逸防止



写真3 約2年半で10cmの出荷サイズに

市場性について

□愛媛県の松山市公設水産地方卸売市場の令和3年次のイガイ（セトガイ）の年間取扱量が2,853kg、金額が1,568千円（平均単価550円/kg）となっている。

宮城県における令和4年度のムラサキイガイの年間取扱量が13t、金額が3百万円で平均単価は232円/kgであり（宮城県総合水産行政システム）、これと比較するとイガイの平均単価は高く、市場性も高いと考えられる。

成果・課題

□これまでに得られた試験結果から初期餌料や飼育環境条件、養殖方法を「イガイ養殖マニュアル」に取りまとめた。

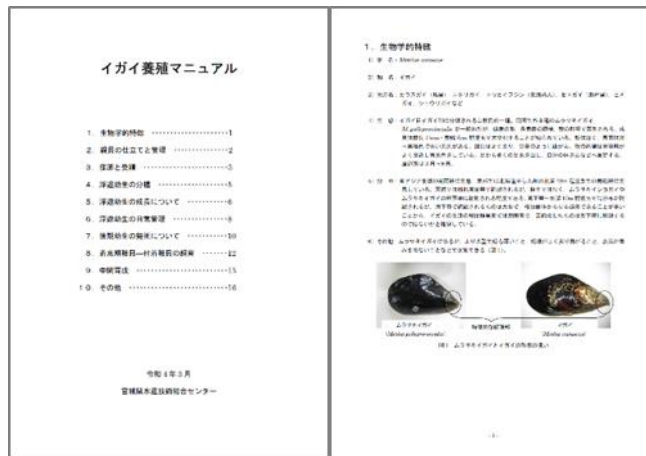


図1 「イガイ養殖マニュアル」の作成

今後は水産業普及指導員が、希望する漁業者の方々に技術の移転を行っていく予定です。イガイ養殖に関するお問い合わせは、気仙沼水産試験場普及指導チームにご連絡ください。（0226-41-0652）